



人生を、最後の一滴まで味わおう

松本 侑壬子・ジャーナリスト

この映画の原題は、「終わり（ロシア映画の最後に出てくる言葉）」で、副題は「コップの中の最後の一滴」というのだそうだ。地理的に西欧と旧ソ連の間に挟まれた東欧ハンガリーという国の、歴史的、政治的社会的、あるいは日常的にも実にさまざまに深読みのできる意味深長な題名だ。それを、あっけらかんと「人生に乾杯！」なんて言い切ってしまうっていいの？ とはいえ、見終わった気分は、確かにそんなふうに表示したくなる、実にいい味わいの映画なのである。

エミルとヘディは、81歳と70歳の夫婦。年金でつましく暮らしているが、年収は国民の平均の3分の1以下とあって、どんなに切りつめても赤字だ。公営住宅の家賃取り立てに居留守を使ってやりすごしたが、すぐに水道、電気などのライフラインまで止められてしまった。

ついにエミルの借金の支払いのために、最後の財産、ヘディのダイヤのイヤリングを手放す羽目に。2人の出会いと愛のかたみである大切な宝ものだ。何一つ贅沢をせず、定年まで真面目に働いてきた結果が、これかー。

1950年代後半、共産党幹部の運転手だったエミルは、秘密諜報機関が摘発のために乗り込んだ旧貴族の邸宅で、隠れていた天井裏から突然目の前に落ちてきた美少女ヘディをとっさに匿う。ヘディがお礼に差し出したのがダイヤの

イヤリングだった。身分と立場の違いを超えて、2人は運命的な恋に落ち…。

それから半世紀。2人は、貧しい生活に疲れ、出会った当時のひたむきな愛を忘れ果てていた。しかし、世間の高齢者への冷たさへの怒りと、自らのふがいなさへの腹立たしさもあって、エミルは立ち上がる。定年時にもらい受けた愛車チャイカ（旧ソ連初の女性宇宙飛行士の愛称）を駆って、まず郵便局に乗り込む。窓口で穏やかにピストルを見せ、「お嬢さん、頼みがー」「あり金をこの袋に詰めて。でなければ、大怪我をすることになるかも」「どうもありがとう。よい一日を」と礼儀正しく鮮やかな紳士強盗ぶり。街中は81歳の強盗に大騒ぎ。始めは警察に協力しようとしたヘディは、防犯カメラに映ったエミルの毅然とした態度に昔を思い出し、胸をときめかす。そして大胆にも夫に合流、ふたりで愛の逃避行へ。

警察の網をかいくぐり、さらに犯行を重ねながら、途中でヘディにすてきなドレスを買い、誕生祝いにリゾートホテルでディナーを楽しむ2人。前代未聞の老人夫婦強盗は、国中に思いもよらない反応を引き起こす。老人による“模倣犯”があちこちに出始め、高齢者による支持デモの波が膨れ上がった。途中から、エミルの車に誤ってはねられた女性刑事アギも一緒に同乗するうちに、なぜこんなに品格ある老人が強盗を犯さねばならないのか、なぜ今まで築いてきた家庭生活を捨てて犯人として追われなければならないのか、と疑問を抱き始めて…。

ガーボル・ロホニ監督は製作時41歳。老人へのまなざしが福祉の対象としてではなく、「老齢期に新たに恋や自由を経験しながら人生の最後を生き抜くこと」にエールを送っているところが、なかなかである。

『人生に乾杯!』

ハンガリー映画（107分）／ガーボル・ロホニ監督

6月、シネスイッチ銀座ほか全国順次ロードショー

©M&M Films Ltd.

